

高津区おはなしアーカイブ

●吉田 豊 (よしだ ゆたか)さん

昭和8年生まれ 85歳

川崎市高津区北見方在住



◆ご家族と家業のお話を

私が小学生の頃には祖父が亡くなっていましたから、祖母と両親と7人兄弟の10人家族でした。父は高津区坂戸出身、母は二子出身で現在の飯島商店の隣の農家でした。有名な「岡本かの子」さんがいますが、旧姓の「大貫かの子」さんのお兄さんと親しかったようです。

私は男3人女4人兄弟の一番上です。

家業は農業と瓦屋の二本立てでしたから、とにかく私ら兄弟も手伝いで忙しかったですよ。子どもだって、物どころがいたら、家業の戦力ですから。

瓦屋の商売を始めたのは、多摩川が近いという土地柄で瓦に適した土が豊富だったのと、自宅の敷地が広がったからです。瓦を作る土地以外は畑にして野菜や陸稲(おかぼ)を作っていました。陸稲はあまり美味しくなかったですね。

とにかく瓦屋として瓦の製造から、販売、請負を一手に引き受けました。

まず、大工さんから注文が来て家の間取り図から、瓦の種類と何枚必要かを考えます。それから、瓦を作る工程に入ります。粘土を捏ね成型し、乾かしてから釜に入れて焼き上げて、それを建築現場に運び、屋根葺きに頼むのです。

うちには4、5人の職人さんがいて、土をこねてプレスして瓦の形を作るのを、小さなときからよく見ていました。

瓦を釜で焼くときの燃料は、高津区の平(たいら)や神木(しばく)の雑木林の松葉や杉の葉なのですが、それを束ねて牛の車で運んできます。それを降ろすときに積荷の数を勘定するのが私の手伝いでした。

瓦を作る作業としては、粘土を捏ね始めてから出来上がるまで、半月はかかります。まず釜に火を点けるのが夜中の2時か3時です。火を入れる前に母が父を起こすときの声を覚えています。土釜は両側から火を焚いて瓦を6段積み上げます。燃料を継ぎ足しながら、約12時間燃やし続けます。焚き口を密閉して火を止めるのが、昼の12時頃で、丸一日釜を休ませます。そして

釜から瓦を取り出すのですが、この日を「釜あけの日」といってとても楽しみにしていました。上の方の瓦を取り出したところからさつま芋をドサッと入れて、下の段に落ちてくる頃には「石焼き芋」ならぬ「瓦焼き芋」の出来上がりです(笑)。なんせ、瓦の焼く温度はかなりの高温ですよ、あの瓦が真っ赤ですから。

釜あけは朝の5時から約3時間、800枚を1枚1枚、二股になっている器具で大切にに取り出します。ここからが、また私らの手伝いです。わら草履を手に挟み、まだ熱い瓦を取り出し、1枚1枚並べる仕事でした。このわら草履も新品ではだめで、古くて履き捨てるくらいの状態が一番良く、手に馴染むし、土が着いているほうが私らの手に熱を通しにくかったのです。

瓦の手伝いのほかに、農業だって同時進行で手伝っていましたよ。一番辛かったのは、夏休みの草取りでしたね。それでも、同級生とは時間を見つけては遊びに行っていましたかね(笑)。

◆どんな小学校時代を

小学校は東高津小学校ができていませんので、高津小学校に通いました。高津小学校は震災でつぶれないようにと頑丈な造りで、正面から広い中廊下が続き両脇が平屋造りの校舎でした。柱と柱の間に斜めに入れる筋交いも大きく、すぐに逃げられる建て方でした。すのこが敷いてある大きなト

イレがあり、なぜかここは思い出深く、未だに夢に出てきますよ。この小学校の建物自体は有名で、よく映画のロケにも使われていました。

小学校の頃の遊びは、昼休みは「母艦水雷(ボカンスイライ)」といって缶けりのような遊びに夢中で、運動場を走り回っていました。近所の子どもらとは戦争ごっこや、多摩川でクチボソなどを釣っていました。

当時は給食が無くて、各自が弁当を持っていきました。アルミニウムの弁当箱に米に麦を混ぜたご飯の上に梅干し、あとは大好きな玉子焼きです。鶏を飼っていたので、毎日母が玉子をそぼろにしたり、厚焼きにしたりして入れてくれました。

◆中学校や高校時代は

長男が瓦屋を継ぐことは当然なことで勉強はしなくてよいという風潮が家庭内にありました。まあ、普通の勉強よりも実業的なほうが良いだろうということで父から勧められて、平間の工業学校に入学しました。

その入学式が空襲でやられて大変でした。南武線が爆撃を受けて電車が不通になり、溝の口駅から親父と2人で平間駅まで線路を歩いて行きました。校舎も燃えてその後、再建まで工場の寮のような所で勉強しました。

修学旅行は、京都や奈良へ普通列車で行きました。1学年5クラス200人が皆5

合のお米を持って行くのです。当時は食糧難で米を持参しないと旅館が泊めてくれなかったのです。

私の中学は、機械科、電気科、航空機科がある男子校でしたが、化学科ができて女子2人が入学してきました。生徒は、川崎市や横浜市からも通学してきて、小学校のように仲良く遊ばなかったですね。

横浜大空襲のときには、灰が川崎市内にも飛んできて驚きましたが、あのように横浜から来てた友だちはどうしていたのかなあと思います。

高校は通学していた中学が新制高校になり工業高校として卒業しました。家業を継ぐのは大学卒業後と、昭和26年に横浜国立大学に入学しました。しかし卒業時の健康診断で結核とわかり、家業を弟に任せ1年間の療養生活を送ることになりました。当時の結核は不治の病と言われていたのですが、幸運なことに化学療法が一般的に行われるようになり、薬と注射で完治しました。母は滋養があつて贅沢な、ほうれん草と玉子焼きを毎日作って食べさせてくれました。そして一番、結核治癒に効いたのは、北見方にある白髭神社への母の御百度参りだと思っています。本当に母は献身的に私の面倒を看てくれました。

◆終戦をむかえて

昭和8年生まれですから、昭和20年の中1のときに終戦になりました。昭和16

年に太平洋戦争が勃発して、戦争が激化したときの思い出は空襲しかありません。夜は「家の明かりをもらすな、煙も出すな」で瓦屋の商売はいったんストップしました。それからは、食べるために専業農家になりました。

当時は空き地や路地の地面に鍬を入れて玉ねぎ、とうもろこし、さつま芋、豆は誰でも作っていましたよ。国有地であろうがどンドン掘って、多摩川の河原にまで、さつま芋を植えていました。まあ、戦後は国有地はだめだと耕作できなくなりましたが。

今の小学生に、通学路に黍(きび)などのコウリヤンを植えていたんだよと教えても、何のことかわからないようです(笑)。黍も、当時は米に混ぜて食べていました。

戦争には父も、父の弟である銀次郎も召集されていましたが、無事に戦地から帰還しました。この叔父は、手りゅう弾や軍用ラップを持って帰ってきました。忘れられないのが九州から広島を通過して帰ってきたときに、遠く被爆地を見た話です。私はこの叔父に、家庭教師のように勉強を教わり、家の仕事も習いました。学校の勉強がわからなくて父に聞きに行くと「銀次郎に聞きに行け」というのです。叔父は、どんなに仕事が忙しくても手を休めて、わからないところを教えてくださいました。でも、私がいまだに理解できないと、怒ってゲンコツをもらったりもしましたがね(笑)。

だから、私も長男としてごく自然に兄弟たちに勉強を教えたり、子守りでおんぶしながら、かくれんぼなどしたりして遊びました。遊んでいる最中に何度、背中にお漏らしされたかわかりませんよ(笑)。でも当時の子どもたちは両親が働いていたから、皆そんなもんでしたよ。

終戦後は、さすがにうちのような農家でも食糧難でした。その頃に覚えているのが、木瓜(ぼけ)の花の蜜を吸ったり、とうもろこしの芯をかじるとほんのり甘くてね。さとうきびの甘さほどは無いのですが。

町内で「進駐軍の払い下げ物資の開放があるよ」と声を聞くと、バターやチーズ、携帯食などを取りに行きました。南武線と平行に軍用線路があって、その上を走る軍用列車に乗っている米兵に手を振ると、お菓子が飛んできましたっけ。

チョコレートは、それこそ街を歩いている米兵に「ギブミーチョコレート」と言うところを聞いていたので言ってみたらくれましたねえ。

近所の友だちが、「米兵はすごく腹をすかせている」と驚いているので、訳を聞くと「なまの玉ねぎをかじっている」と言うのです。今やオニオンスライスなどと言って、サラダにも使う一般的な食べ方になりましたが、その当時の私らには、ありえないことでした。

◆当時の食生活は

うちは商売をしていましたから、食卓は職人も合わせて14、5人が毎食集まり、それはそれはにぎやかでした。でも食事内容は質素で、おかずは漬物と味噌汁が定番で、あとはサンマくらいかな。昔は実にサンマが安かったのですよ。今年は急騰ですね。

盆暮れには、うどんが特別に食べられました。うどん粉を持っていけば、うどんにしてくれる店があったのです。その店はもちろん農家なのですが、製麺を作るローラーのような機械を持っていて、製麺後に細切りにしてくれました。そうでないと日常、うどんは食べられませんでした。普通は家で、すいとんや雑炊ですよ。野菜と醤油だけはだいたい家にありましたから、その野菜醤油スープの中にどちらかを入れるのが、母のまかない食でしたね。蕎麦は食べる機会がなかったねえ。

脱穀器の1つの千歯こきがうちにあり、もみをはずして精米にしていました。この精米に大麦をつぶして混ぜて食べてもいました。

◆地域の移り変わり

私の頃の商店はヤストモマーケット、モチダ写真館、今の文教堂である石原文具店くらいなものでした。

交通の便は、中学時代には南武線がすぐであり、都電のような形の玉川電車が南武

線の改札口までありましたが、後に2両連結の大井町線となり、現在のように改札口は離れてしまいました。

昔はこのあたりは、うちと白髭神社の建物しかありませんでした。家から、東京都方面を見ると、多摩川の堤防が左右に見えて木立がとても綺麗でした。春になると桃の花のピンク一色でねえ。土手の上を人が歩く姿も見えたし、のどかでした。私が小さなときは、道も府中県道しかなかったし。

昭和16、7年には日本通信などの軍需工場が建てられ、それに応じて市営住宅など家が建ち、大勢の住人の町となりました。今やマンションなどが林立しています。北見方の農家の人たちが、畑をマンションにして不動産屋やオーナーになってしまいましたから(笑)。

◆今、振りかえってみて

瓦屋だったのに、もはや1軒の家に、いったい何枚の瓦が必要だったのか、もう忘れてしまいましたよ(笑)。

大学卒業後は家業を弟に任せて、教員の道に進みました。市内の小学校2校を巡り、結局教育センターの仕事に長く就きました。

妻とは教員時代の職場結婚です。

私の兄弟は第一人を火事で亡くしましたがあとは皆、分けた土地で近所に元気で住んでいます。

この辺は小さなときは、街灯も無く夜は畑も田んぼも真っ暗で怖かったですが、今や明るくにぎやかな町になりました。

北見方で生まれて育って暮らして85年、愛着があります。我が町で生まれて死ぬるということは幸せだと思います。今の趣味は陶芸です。

「井戸の中の蛙の幸せ」とでも言いましょうか(笑)。

(平成30年7月20日取材)